

第 57 回 (平成 19 年度) 国際会議出席費補助金受領者出席報告

XIXth International Congress on Fibrinolysis and Proteolysis に参加して

日本大学生物資源科学部 奥村暢章

中欧オーストリアのウィーンで、7月6日から10日まで開催された第19回 International Congress on Fibrinolysis and Proteolysis に参加した。本会は著者らの主要研究テーマである線溶の分野では唯一の国際学会であり、International Society for Fibrinolysis and Proteolysis (ISFP) が主催している。学会はウィーンの街の中心部とは少し離れた、ウィーン大学の Old General Hospital Campus で行われた。ウィーン大学は1300年代に創立され、過去にノーベル賞受賞者を複数輩出するなど、非常に歴史のある大学である。キャンパスを訪れると随所に古い建物が残っており、しかも現在でもそれらの建物が実際に利用されていることに驚いた。学会初日には、それら歴史的建築物の一つである Narrenturm (通称 Fool's tower (愚か者の塔)) で Opening Ceremony と Welcome Reception が、行われた (写真 1)。Narrenturm は1784年にヨセフ2世の指示のもとに建設された、ヨーロッパで初の精神病院である。もっとも現在では病院としては閉鎖され、病理・解剖学博物館として、一般開放されている。会議そのものは近代的なホールで行われた (写真 2)。

著者は今回、本会議に初めて参加したが、当初思っていたよりも小さな学会であった。しかしながら線溶系研究の分野では第一線で活躍する研究者が多く参加していた。組織委員会によると、本学会への参加者は35カ国から約221人であった。そのためか、会そのものもよく組織され、進行も円滑に進められており、このことは閉会にあたり学会長の Johann Wojta 教授が “Small is beautiful and Small is efficient” と評したことからも伺えた。おそらく本学会に参加する研究者は大きい学会よりも、小さな学会で実際に研究者と面と向かって話せるような学会が好きな人が多いのかもしれない。

発表についても口頭、ポスターともに発表する時間、討議する時間が十分に用意されていた。著者は2日目に “Growth-related regulation of TAFI and its role in hepatocyte proliferation.” という演題で、ポスター発表を行った。ポスター発表は座長がつき、討議の時間設けられていたため盛況に行われた。著者の発表にも10人くらいの方



写真 1



写真 2

から質問、助言を頂き、充実した発表になった。著者らが注目している血漿タンパク質 Thrombin activatable fibrinolysis inhibitor (TAFI, 血漿カルボキシペプチダーゼ) の分野においては、TAFI を同定した M. Nesheim らのグループや、著者らの共同研究者で抗 TAFI 抗体作製の先駆者である P. J. Declerk, A. Gils らのグループ、TAFI ノックアウトマウスを作製した J. C. Meijers など TAFI 研究に携わるほとんどの研究者が本会に参加しており、TAFI 研究の最先端を知ることができた。とくに今回は P. Marx らが TAFI の結晶化に成功したという報告がされたため、今後 TAFI の分子構造やその機能についてますます研究が発展することが予想される。しかしながら著者らの行っているような TAFI の発現調節機構や生



写真 3

理機能に関する研究はまだまだ少なく、発展の余地があると感じた。臨床的には TAFI は血栓症治療薬の標的分子と

して注目されている。今後さらに研究を進め、TAFI が血栓症をはじめとした疾患に対する治療薬の分子標的になるのか追究する必要があると感じた。

2 日目には Congress Dinner が開催され、参加者との交流を深めた。Congress Dinner はドナウ運河に沿った Urania 天文台で行われた。Urania はアールヌーヴォーの建築家である Max Faiani により設計された建物である。Urania の屋上からはウィーンの街が一望でき（写真 3）、楽しむことが出来た。

次回の学会はオランダアムステルダムで行われる。著者も機会を得ることが出来れば、是非とも参加したいと思う。

最後に、国際会議参加にあたり、助成を賜りました財団法人農芸化学研究奨励会に深く感謝し、御礼申し上げます。

ゴードン研究会議 (Gordon Research Conference) に参加して

大阪大学産業科学研究所
生体情報制御学研究分野 西野邦彦

米国マサチューセッツにおいて 2008 年 7 月 6 日～11 日にかけて開催されたゴードン研究会議 (Gordon Research Conference) に参加、発表を行った。ゴードン研究会議は、最先端の研究者が自由な雰囲気の中で交流し、互いの最新情報を交換して議論することを目的としている (<http://www.grc.org/about.aspx>). Johns Hopkins 大学の Neil E. Gordon 博士のアイディアによって開催された

ことから、本会議は上記のように呼ばれている。1931 年に開催されて以来今日まで発展し続け、現在では年間約 200 にわたる特定分野について各々会議が開催されている。今回の研究会議会場までは、ボストン空港近くのホテルからゴードン専用のチャーターバスに乗って移動したが、バス待合室の掲示を見ると、参加した会議と同じ週に開催されるゴードン研究会議がボストン付近でも 12 個もあるのには驚いた。待合室でも何人かと話をしたが、皆、異なる専門分野で活躍中の研究者ばかりであり、多彩な顔ぶれで盛り上がりを見せていた。ゴードン研究会議はアメリカを中心として世界各地で開催されるのだが、基本的にスケジュールは共通しており、日曜日に受付がはじまり夕食後に会議が開始され、金曜日の朝に解散となる。期間中



図 1. ボストンの空港からみた夕焼け



図 2. ゴードン研究会議の会場